

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：44304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370222

研究課題名(和文)近代日本児童出版文化史の研究 - 明治期における博文館出版文化の内容と特質

研究課題名(英文)The Study of the Modern History of Children's publishing Culture: Hakubunkan Publishing in the Meiji Period

研究代表者

遠藤 純 (ENDO, JUN)

華頂短期大学・幼児教育学科・准教授

研究者番号：10416258

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：具体的な研究成果としては、博文館の雑誌内容目次の作成があり、さらにそれらを活用した「少年世界」等の雑誌研究がある。出版・教育・雑誌メディアの分野から同館について多角的に考察、当時圧倒的な人気を誇った作家、巖谷小波を雑誌の主筆とした雑誌運営を研究し、博文館の少年少女向け雑誌の具体的な作品を通して小説観や文学観を発信していく総合雑誌としての様相を分析した。結果、当時の博文館の雑誌が大正期に花開く童心主義の土壌を作った様子を確認することができた。また、ターゲットとしての読者についても雑誌投稿欄を詳細に検討し、他誌との比較を通してその実態および読書空間の特質についてまとめた。

研究成果の概要(英文)：This research involved the recording and study of the contents of magazines such as Shonen Sekai.(Boys' World). The project investigated Hakubunkan from many perspectives such as publishing culture, education, and the history of magazines, and overviewed the organization of magazines of which IWAYA Sazanami was a chief editor. It also analyzed the magazines by looking at the concept of novels and literature in the magazines through actual novels, and articulated their roles in the organizing of many children's cultural activities. All of which confirmed that Hakubunkan's publishing of magazines for children formed the basis for the concept of Doshin Shugi (belief in children's innocence) in the Taisho period. The project also investigated the readers' columns of Hakubunkan magazines and compared them to ones from different publishers.

研究分野：児童文学・児童文化

キーワード：児童文学 児童文化 児童雑誌 博文館 巖谷小波 読者 出版

1. 研究開始当初の背景

明治 20 年代から大正・昭和期にかけて、博文館が築いた児童出版文化に関する足跡は決して小さなものではなく、その時代の児童文化の形成、ひいては児童観や教育観の形成に一定の役割を担ったと考えられている。

しかしながら、管見では当時の児童文化活動の目的や趣旨、具体的な内容や方法、また実態・実状については、重要でありながらも詳しく論証されたことがない。例えば、博文館の出版文化を研究したものとして、『少年世界』と同時期の雑誌『太陽』を取り上げた鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』(思文閣出版、2001 年)があるが、同書において、児童文化は一切取り上げられていない。他にも、明治期の少年少女と読書に関する研究、雑誌投稿と少年に関する研究などがあるが、いずれも研究対象範囲が限定的(時代や雑誌)なものであり、体系的なものではない。これは推察するに、調査範囲が膨大多岐に渡り、個人で取り組むには負担が大きいこと、かつ対象資料へのアクセスが困難であることが挙げられる。

そこで本研究では、まず明治期の児童文化の礎を築いた博文館の出版文化に着目し、その活動の全体像を把握し、明治期の博文館の出版文化が具体的にどのような読書空間や児童文化観を形成し、当時の少年少女たちがそこから何を摂取していたのかを検証したいと考えた。それにより、博文館が取り組んだ児童出版文化が形成したものに迫りたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、日本近代児童文学史上、その胎動期・黎明期にあたる明治期に児童文学・児童文化分野に光をあて、児童出版文化の礎を築いた博文館(出版社)について研究するものである。

博文館が明治期においてどのような考えのもとに児童出版物を刊行したか、具体的には出版、編集、執筆を行った博文館の組織のありようや作家や構成員の考え方、また、広報の一環として行われたイベントの内容と児童文化活動との関係性、そしてこれらに対する子ども読者の受容の様態について明らかにし、その今日的意味についても考察を行うことが目的である。

3. 研究の方法

本研究では、まず明治期の児童文化の礎を築いた博文館の出版文化に着目し、その活動の全体像を把握し、明治期の博文館の出版文化が具体的にどのような読書空間や児童文化観を形成し、当時の少年少女たちがそこから何を摂取していたのかを検証したいと考えた。

そのためには、博文館出版物の詳細な調査が必要となるが、本研究チームではこれまで、同館が刊行したさまざまな雑誌細目を作成

するなど(科学研究費補助金:研究成果データベース「明治大正期児童雑誌内容目次データベース」平成 18,20)、少なからず研究資源の蓄積がある。こうしたものを活用しつつ、さらにデータを積み上げ、それら蓄積データから読み取れるものについて研究を行った。

具体的には、作品において作家が記述した世界観、編集者の編集意識やそれらを体現する誌面構成、投稿欄で記述されている内容とその特質、愛読者をつなげる仕組み、広告における意匠や打ち出し、一般誌や競合誌との関わりなど、これらを具体的に検討することとした。

4. 研究成果

本研究の成果としては、以下の点が挙げられる。

まず、明治期を代表する出版社である博文館の、雑誌内容目次を作成できたことである。「日本之少年」「幼年雑誌」「幼年世界」など、冊数にして約 400 冊、13,239 レコードを作成した。これまでに蓄積してきたデータ(「少年世界」「少女世界」)を加えることで、明治期の雑誌内容目次がより充実し、児童出版文化を研究するうえでの基礎的データが整備できたといえよう。

こうしたデータを活用することで、博文館の初めての本格的な少年雑誌である「少年世界」の研究が、多様な観点から行えるようになった。具体的には、日本児童文学学会第 54 回研究大会(2015 年 11 月 8 日、於:大阪教育大学)におけるラウンドテーブル「博文館の児童出版物がめざしたもの - 明治期における出版、教育、雑誌メディアの視点から -」にて、メンバーである遠藤純が「『少年世界』主筆としての巖谷小波 - その編集者意識について -」と題して口頭発表した。これは、雑誌「少年世界」主筆としての巖谷小波が誕生するまでの様子について、小波自身が書き残した日記から関連する事項を整理検討したもので、招聘した博文館側の意向にも論及したものである。以上に加えて、博文館および雑誌「少年世界」により多角的かつ深く迫るために、出版史の観点から博文館に造詣の深い浅岡邦雄氏の「明治期博文館の児童向け出版物」、また教育との関連から岩田一正氏「『少年世界』が提示した少年像 - 国語読本との比較を中心に -」の口頭発表を組み合わせ、その後討論を行って、出版・教育・雑誌メディアの分野から博文館に迫るラウンドテーブルを企画・実施した。その詳細は「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 29 号(2016 年 3 月 31 日)に掲載しているが、浅岡氏は博文館という出版社の全体像および児童出版を行うようになった経緯について報告され、岩田氏は「少年世界」で提示された少年像と当時の国語読本の少年像について比較検討、その特徴を具体的に指摘された。いずれも、注目すべき資料の提示や分析に富

み、極めて有意義なフォーラムとなった。

一方、やはり研究メンバーの土居安子は、雑誌メディアの主要な柱である読者投稿について具体的にデータを収集・蓄積し、そのうえで「少年世界」誌が当時、どのような読書空間を子どもたちに提供したのか、その受容形態を含めて詳細に分析した。周知の通り、雑誌投稿については数量が膨大であり、従前に研究上作成された細目等でも除外されるのが通例である。土居は、明治から大正にかけての「少年世界」投稿欄を分析、それらの特質をより鮮明にするために、同時期の弟妹誌である「少女世界」投稿欄についてもデータ化を進め、以上を比較することで、明治から大正にかけての雑誌文化における投稿の実態について論究した。この成果については、「大正期『少年世界』と『少女世界』の読者投稿欄」(「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第28号、2015年3月31日)としてまとめられた。

さらに土居は、「少年世界」の後続誌となる「少年少女譚海」(大正9年創刊)を考察の対象に加えた。同誌は、「少年世界」の編集助手でもあった南部新一が編集主幹を務めた雑誌である。いうまでもなく、明治と大正は地続きである。後続・後継誌を取り上げることにより、その連続性に着目し、大正期から明治期に遡及したアプローチといえる。競合誌との比較も含め、その成果は日本児童文学学会第54回研究大会(2015年11月8日、於：大阪教育大学)における口頭発表を経て、「『少年少女譚海』(博文館)の内容と特質 - 他誌との比較を通して - 」(「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第29号、2016年3月31日)および「『少年少女譚海』(博文館)の内容と特質 - 『少年倶楽部』との比較を通して - 」(「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第30号、2017年3月31日)として公表された。

また、雑誌における作家や編集者の論考や時評などは、雑誌の誌面作りに関して重要な位置づけとなる。文芸評論家として、博文館刊行雑誌において「時評」を担当していた大町桂月の文学観を検証し、児童文学観に及ぼした影響について考究したのが目黒強「大町桂月の修養主義的文学観」である。本論では、桂月が児童文学を通して文学趣味と「武士道」を養成できると主張し、それらはお伽噺が有害とされた明治期にあっては、児童文学を正統化する思想的基盤として機能したと指摘した。今後、さらに博文館主要誌にて展開された児童文学観・児童文化観の検討が待たれる。

ところで、博文館の児童出版は雑誌だけではない。もう一つの柱に、我が国初の近代的な子どもの本と言われる『こがね丸』(明治24年)や、当時商業デザインの分野で活躍していた画家を積極的に起用した絵本分野な

どを含め、図書・絵本・叢書群などの仕事がある。

このうち、図書・叢書については、博文館が比較的早い時期に刊行した児童出版、とりわけ子ども向けに体系的な知識を届けることを目的に刊行されたと思われる叢書「幼年全書」や「幼年玉手函」がある。メンバーの小松聡子は、読者として当時見いだされた「幼年」を視野に入れながら、「明治二〇年代の博文館の幼年向け叢書について - 「幼年全書」「幼年玉手函」を中心に - 」として研究発表を重ねた。各叢書の全体像を押さえつつ、そこで提示されている世界観について言及するとともに、博文館のねらいについて考察したものである。叢書の詳細な分析を通して、当時は雑誌と図書が未分化であったこと、教科書や教育との絡みが殊の外大きく、重要視されていたことなどが明確になった。以上は今後さらに分析が積み上げられ、論文として公表される予定である。

博文館のメディア・イベントについても触れておく。

同館が出版・印刷メディアをベースとしつつ、さらに相乗効果を狙うものとして、巖谷小波や彼の活動に賛同する者による口演童話活動、および愛読者らを組織化して抱え込み、彼らに向けてお伽劇やお伽芝居などの児童文化活動全般を行う大小さまざまなメディア・イベント(愛読者会、愛読者大会)を行っていたことはよく知られている。本研究においては、こうした博文館によるメディア・イベントも考察の対象に加えた。

まずは、小波によって明治30年前後から始められた口演童話である。我が国ではいつ頃から、子ども向けの組織的なイベントが開催されるようになったのか、その草分けともいえる小波の活動について、主に彼の書簡や日記などからその痕跡を辿ったのが「巖谷小波のお伽口演に関する覚え書き - 南部新一(新井弘城)宛 巖谷小波書簡から - 」(遠藤純、「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第28号、2015年3月31日)である。小波が全国各地から発信した書簡に拠ると、一回につき5,000人規模の口演を一日4~5回行ったとあり、当時の影響力の大きさをうかがい知ることができた。今後さらにデータを収集し、分析して口演童話活動の実態に迫っていきたい。

こうした小波の口演活動を引き継ぎ、全国各地に「お伽倶楽部」を組織して、印刷媒体だけにとどまらない児童文化運動を展開したのが久留島武彦である。子ども向けの芝居や劇などの活動に取り組み、大きな功績を残した「お伽倶楽部」だが、その始まりについては諸説あり、必ずしも明確ではなかった。こうした点から、従前の研究を再検討しつつ、「少年世界」などの資料から「お伽倶楽部」にかかわる記述を丹念に検証しながら整理検討、創始時期の特定を行ったのが浅岡靖央

「お伽倶楽部はいつ始まったのか - お伽倶楽部研究序説 - 」(「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 30 号、2017 年 3 月 31 日)である。本論文により、これまでのお伽倶楽部発足時期の問題がようやく決着したものといえる。今後は、この児童文化運動の内実について、より詳細な研究が待たれるところである。

なお、以上の博文館の児童出版・イベント活動を支えてきた館員(出版人・編集者等)についても述べておきたい。前述した通り、博文館館員名簿(大正 11 年から昭和 2 年まで)合計 5 冊、全 792 名分についてデ・タベ・ス化し、調査でき得る範囲で肩書きや業績、その他関連情報等について入力を行った。本デ・タを整備するなかで、博文館関係者の出版・編集ネットワークが活用された事例として、メンバ・の酒井晶代は博文館関係者と製菓会社の児童文化戦略について詳細に考察した(2)。

名簿の刊行時期としては大正から昭和にかけてのものであり、明治期のものではないが、今後も名簿そのものを収集してデ・タ化し、それによって出版にかかる人物の経歴および人的ネットワークについて考察していきたい。

以上のように、明治期に児童向け出版物を発行し、圧倒的な人気を博した博文館は、巖谷小波を中心とした作家集団であり、さまざまなイベントをはじめとする児童文化活動の企画集団であり、また読者のネットワークの要であった。具体的な作品を通し、小説観や文学観を発信していくメディアとしての総合的な活動は、大正期に花開く童心主義の土壌を作ったとも考えられる。メディア状況が大きく変化し、出版文化が衰退しつつあるとも言われる現在、雑誌を始めとする児童出版文化をいかに後世に伝えていくか、総合的な児童文化活動をいかに実現していくべきかが問われている。以上を考えるうえで、明治期のありようを検証することは、現代のそれを考えるために極めて有意義であると思われる。この成果を生かし、大正期における児童出版文化を考察し、歴史的視点から現代の児童出版文化、および児童文化のありようについて研究を継続したい。

以上が 3 年に渡る研究の成果である。今後、本プロジェクトとしてさらに蓄積デ・タを精緻に分析することで、個々の研究者が自ら関心のあるテ・マに応じて研究を進めることになるだろう。かつ、引き続き組織的・計画的に雑誌を始めとするデ・タを作成・公開し、基礎的・有用な研究デ・タの作成にも務めていきたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文](計 8 件)

遠藤純「巖谷小波のお伽口演に関する覚え書き - 南部新一(新井弘城)宛 巖谷小波書簡から - 」

「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 28 号、査読あり、2015 年 3 月 31 日、80-100

土居安子「大正期『少年世界』と『少女世界』の読者投稿欄」

「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 28 号、査読あり、2015 年 3 月 31 日、59-79

浅岡邦雄、岩田一正、遠藤純、ラウンドテ・ブル報告:

「博文館の児童出版物がめざしたもの - 明治期における出版、教育、雑誌メディアの視点から - 」

・浅岡邦雄(中京大学)「明治期博文館の児童向け出版物」

・岩田一正(成城大学)「『少年世界』が提示した少年像 - 国語読本との比較を中心に - 」

・遠藤純(京都華頂大学)「『少年世界』主筆としての巖谷小波 - その編集者意識について - 」

「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 29 号、査読あり、2016 年 3 月 31 日、37-73

土居安子「『少年少女譚海』(博文館)の内容と特質 - 他誌との比較を通して - 」

「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 29 号、査読あり、2016 年 3 月 31 日、13-36

浅岡靖央「お伽倶楽部はいつ始まったのか - お伽倶楽部研究序説 - 」

「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 30 号、査読あり、2017 年 3 月 31 日、15-32

目黒強「大町桂月の修養主義的文学観」

「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 30 号、査読あり、2017 年 3 月 31 日、1-14

土居安子「『少年少女譚海』(博文館)の内容と特質 - 『少年倶楽部』との比較を通して - 」

「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 30 号、査読あり、2017 年 3 月 31 日、1-18

遠藤純「研究プロジェクト活動報告: 近代日本児童出版文化史の研究 - 明治期における博文館出版文化の内容と特質」「大阪国際児童文学振興財団研究紀要」第 30 号、査読あり、2017 年 3 月 31 日、47-52

[学会発表](計 4 件)

日本児童文学学会第 54 回研究大会(2015 年 11 月 8 日)於: 大阪教育大学

【ラウンドテ・ブル】

「博文館の児童出版物がめざしたもの - 明

治期における出版、教育、雑誌メディアの視点から - 」

〔登壇者〕

- ・浅岡邦雄「明治期博文館の児童向け出版物」
- ・岩田一正「『少年世界』が提示した少年像 - 国語読本との比較を中心に - 」
- ・遠藤純「『少年世界』主筆としての巖谷小波 - その編集者意識について - 」

日本児童文学学会第 54 回研究大会 (2015 年 11 月 8 日) 於: 大阪教育大学

・土居安子「『少年少女譚海』(博文館)の内容と特質 - 他誌との比較を通して - 」

日本児童文学学会第 55 回研究大会 (2016 年 10 月 30 日) 於: 日本女子大学

・目黒強「大町桂月の修養主義的文学観」

日本児童文学学会第 55 回研究大会 (2016 年 10 月 30 日) 於: 日本女子大学

・土居安子「『少年少女譚海』(博文館)の内容と特質 - 『少年倶楽部』との比較を通して - 」

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 純 (ENDO JUN)

京都華頂大学・現代家政学部・現代家政学
科・准教授

研究者番号: 10416258

(2) 研究分担者

土居 安子 (DOI YASUKO)

一般財団法人大阪国際児童文学振興財
団・その他部局等・総括専門員

研究者番号: 00416257

小松 聡子 (KOMATSU SATOKO)

一般財団法人大阪国際児童文学振興財
団・その他部局等・特別専門員

研究者番号: 90416256

酒井 晶代 (SAKAI MASAYO)

愛知淑徳大学・創造表現学部・教授

研究者番号: 10279953

目黒 強 (MEGURO TSUYOSHI)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号: 70346229

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

浅岡 靖央 (ASAOKA YASUOU)

白百合女子大学・人間総合学部・教授

研究者番号: 60788941